アスリートに学ぶビジネス成功への軌跡（第26回）

球界の不世出のスター・長嶋茂雄の熱いプロ意識

2020.08.20



「4番、サード、長嶋」

この場内アナウンスも1974年10月14日の中日ドラゴンズとの引退試合を最後に聞くことはできなくなってしまった。けれども、読売ジャイアンツの4番打者としてチームのV9をけん引した長嶋茂雄さんの熱いプレーは、今も人々の心の引き出しに大切にしまわれているのではないだろうか。

中でも昭和のプロ野球ファンを沸かせたのは、1959年6月25日、昭和天皇並びに香淳皇后を後楽園球場にお迎えして行われた初の天覧試合だろう。この試合の直前までスランプに苦しんでいた長嶋さんだったが、当日は燃える男の本領を発揮し、不振がウソのような大活躍をして見せる。

対戦相手は大阪タイガース（現阪神タイガース）。まず、1点を先行された5回裏に、ソロホームランを放つ。そして4対4で迎えた9回裏、先頭打者として打席に立った長嶋さんが、5球目のストレートを振り抜くとボールはレフト上段へ。プロ入り初のサヨナラ本塁打で歴史的な一戦の勝利をもぎとったのだ。

ここぞ！というときに観衆を魅了するプレー

もう1つ、個人的に忘れられない試合がある。1968年9月18日の試合。対戦相手は同じくタイガース。荒れに荒れた試合だった。

4回、タイガースの先発投手バッキーは、1打席目に死球を与えた王選手に対し、ここでも2球続けてビーンボールまがいの球を投げた。これをきっかけに両チーム入り乱れての大乱闘に発展。試合再開後、退場となったバッキー投手に代わってマウンドに上がったのは後藤投手。ところが、なんと王選手の後頭部に死球を与え、倒れた王選手はタンカで病院に運ばれてしまう。またも乱闘。甲子園球場の殺伐とした雰囲気がブラウン管越しに伝わってくるようだった。そこで4番長嶋の登場となる。

カーン！

長嶋さんはホームランをかっ飛ばしてくれた。観戦していた私の気分がスカッとして、甲子園球場の空がどんよりとした曇り空から青空に変わったように思えた。その1発で長嶋さんに魅せられてしまった。

監督との出会いでプレースタイルを確立… 続きを読む